

序にかえて：児玉徳美先生とヴァナキュラー文化研究会

海寶康臣

児玉先生が亡くなられて半年後に、先生の奥様のご厚意で、先生が所有しておられた書籍をいただくために、先生の別荘を訪問させていただいた。そこで目にした書籍は、言語学に関連するものはいうまでもなく、人文社会科学に関連するあらゆる領域に及んでいた。言語分析に関して児玉先生が目指しておられたことを考えると、それは何ら不思議ではない。児玉先生は今日の言語分析が閉塞状況にあるとしてその状況の打開に向けて、ご著書『ことばと意味』の中で五つの提案をされている。その提案の中に「言語が人間のあらゆる営為にかかわるだけに、他の研究領域との協力により、人文社会現象の法則性を示すものとして人文社会科学のモデルになるよう目指す」というものがある。提案の中で児玉先生は、言語学が自らの領域に閉じこもるのではなく、他の研究領域との協力の必要性を強調されている。

ヴァナキュラー文化研究会はこれまで、「文学」、「フォークロア」、「言語学」という異なる領域間で互いに学びあい、協力しながら日常的で自然発生的な文化現象について研究を行ってきた。ヴァナキュラー文化研究会は、異なる専門領域間の協力に基づく研究の実践の場といえ、その意味で児玉先生のご提案と方向性を同じくしている。児玉先生はヴァナキュラー文化研究会の活動に関心を寄せてくださった。2010年4月開催のヴァナキュラー文化研究会言語学セッションワークショップ、「グローバリゼーションの中の日本語 - その活力と感性 -」にも足を運んでくださり、研究発表の質疑応答の際に沢山の質問と有益なご助言で同ワークショップを大いに盛り上げてくださった。また、その後の懇親会、さらには二次会もアカデミックに盛り上げてくださり、ワークショップの企画者を最後まで支えてくださった。

児玉先生に上記のご著書をいただいた際、お手紙が添えられており、そこには「言語分析は古代ギリシア時代のように人文社会科学の英知を統合してその中核となるべきと考えています」と記されていた。児玉先生の別荘の本棚にあった幅広い領域の書籍はこうした先生のお考えの現れだったと感ぜられる。児玉先生がいらっしゃらない今、人文社会科学の中核として、そのモデルになるような言語分析を目指すのは野心的な挑戦といえよう。我々に何ができるのか。もう児玉先生に直接お聞きすることはできない。しかしながら、児玉先生のご著書やご論文を通して先生と対話することは可能である。ヴァナキュラー文化研究会言語学セッションは、その対話を通してあるべき言語分析に近づくべく、これまで以上に活発に活動していきたい。

本特集はこれまで児玉先生にご支援を受けていたヴァナキュラー文化研究会が、児玉先生への追悼の意味を込めて企画したものである。本特集のテーマは「ことばの日常と非日常」であり、所収されている論文で扱われている言語現象や理論的枠組みは多様である。しかしながら、どの論文の執筆者も児玉先生にたいして深い感謝の気持ちを有しているという点では一致している。6名の執筆者中5名は大学院生として児玉先生から指導を受けている。本特集論文の内容の

多様性は、兄玉先生が広範囲に及ぶ言語研究の領域のいずれにも精通されていたことの現れといえよう。